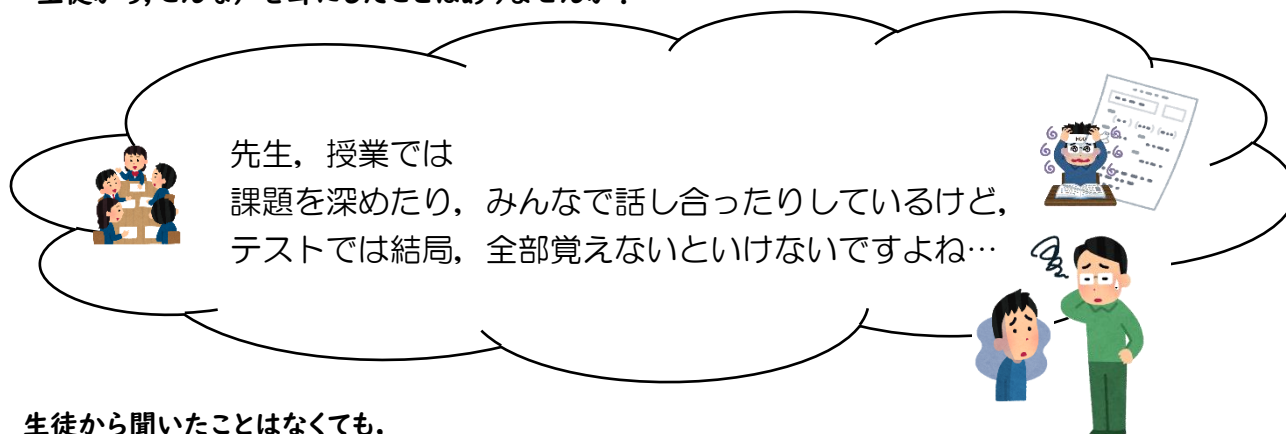


テスト問題を通して、
「とにかく“覚える”社会科」から「いろいろなところで“使える”社会科」という意識を高めていく

“社会科は暗記科目”という教科観を生徒が抱く一因に、ペーパーテストの存在があげられることは、みなさんの学生時代の経験からも察しがつきそうです。

生徒から、こんな声を耳にしたことはありませんか？



生徒から聞いたことはなくても、
授業で付けたい力とテストで見取ろうとする力の違いを、
ご自身でも感じ、悩まれているかもしれません。

こうした生徒の思いや指導者の困りを解消するために、
ペーパーテストをなくすというのも一案ですが、
研究ではペーパーテストを通して、「脱“覚える社会科”」を目指す問題の作成にも取り組みました。

例えば、次の問題を解いてみてください。

下の【説明文】は、ある国で見られる伝統的な住まいや料理についての説明です。このような伝統的な生活が見られる国とは、どこの国ですか。【選択肢【ア～エ】のうちから最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

【説明文】

この国では、オンドルと呼ばれる床暖房システムや、白菜などの野菜と新鮮な海産物などの食材を併せて用いた漬物などが有名です。



「指導と評価の一体化」のための学習評価の参考資料 をもとに一部修正し作成

社会科は暗記科目という意識の強い生徒は、「“オンドル”なんて知らないからわからない」というかもしれません。一見すると、指導者もまた、「“オンドル”を教えておかないといけないのか…」と思われたかもしれません。

しかしよく見ると、オンドルとはどこの国のものかというような内容的な知識をもっていなくても、正解の“エ”にたどり着くことができたと思います。

どのように正解にたどり着かれたのか、思考過程をたどってみましょう。

正解にたどり着くまでに選択肢ア～エのそれぞれの国が、
「何という国か」ではなく、「どこに位置しているか」に着目されたのではないのでしょうか。
そうすると、選択肢の地図は内陸国かそうでないか、暑いところ、寒いところが表示されている情報だということに気付き、
【説明文】中の“新鮮な海産物”とか“暖房”がキーワードになることに気付かれたのではないかと思います。

正解にたどり着くことができたのは、
思考の過程で、意識的か無意識だったかはわかりませんが、

「その国の位置や気候は、生活・文化・産業に影響を与えることがある」という知識を働かせることができた。

あるいは図のように、

「つながった3つの見える一ぺ（見方・考え方）を働かせて、この問題を見つめる」ことができた
からではないでしょうか。



内容的な知識って…？
見える一ぺって何！？
と思われた方も多いかと思います。
詳しくは、論文やその他の成果物を
ぜひ、ご覧ください！

いかがでしょうか。

この例のような問題をテスト問題の一部に位置付ければ、

学習していることってこういうことか！？という気付きを促して、「覚える社会科」から「使える社会科」という意識を
高めていけそうに感じませんか。

- 授業で扱っていない情報が含まれる。
- 内容的な知識がなくてもできる、もしくは必要となる内容的な知識が少ない。
- 内容的な知識が答えではなく、問題を解くための材料になっている。
- 情報の読み取りや取捨選択を伴っている。
- 正解にたどり着くために、見方/考え方/生きて働く知識を理解していることが必要である。

実践で使用した問題を
いくつか紹介します。
問題作成や、授業づくりの
参考にいただけると
幸いです。